

「神道」と「日蓮上人によりて開顯せられたる佛教」

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

在島三年

文學博士 姉崎正治君

拆伏逆化

東洋大學講師 境野黃洋君

三教會同に就て 三上白碧生

統一



日蓮上人の御尊容と婦人の修養

東京美術學校教授

竹内久一君

日蓮上人云く

此の土の我等衆生は五百塵點劫より已來教主釋尊の愛子なり。不孝の失に依て今に覺知せずと雖他方の衆生には似るべからず。有縁の佛と結縁の衆生とは譬へば天月の清水に浮ぶが如し(續蓮文一、〇三二頁
内九法華取要抄)

「神道」と「日蓮上人により開顯せられたる佛教」

〔一月十四日明治大學記念講堂に於ける天晴會第三周年記念大會の講演也。特に佐藤大佐に請ふて掲載することなし。〕
(三上生)

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

軍人が斯くの如き演壇に現はれ斯の如き大演題を掲げて講演致しまするのは、如何にも異様に感ぜらるゝのでありましよう、ことに前を見ても高德中の高德、後を見ても先輩中の先輩でありまうので、其間に難りまして借越なことを申しますのは、如何にも大膽な所爲と存じますが、世俗にも雜魚のト、マヨリと申事もありまするので此の點は御許しを願ひます、特に亦私も人間並に風を引きましたので、何うも咳が出て仕方がありませんね、諸君にも大分御風を召した方が御在りになると見へまして、御咳の聲なども大分致す様であります、若し途中で若しくなりましたなら、其節は御免を蒙らうかと存じます。

諸先生方の經驗多き御身柄から御考になりましたならば、講演の長短などは御自由の事に考へますが、私如きものに取りましては中々にそう巧くは参りませぬ、鳥渡考て見ますと、短ければ短い程ボロが出ませんで、反て善さそうなものではあります、短い間に纏まりの附た御話を致しますのは誠に困難でありますので、不慣の者に取りましては時間の制限程困難なものはありません。

乍去大體から考て見ますれば、凡そ物事は満足と云ふことはありませぬ、日蓮上人も一滯を嘗めて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよと仰せられました通り、一部分を御話し申上げ夫を御玩味下されば大體の意味が御分りになるであらうと信じますので、兎に角どうにか纏りをつけて見たいと存じます。

先刻幹事より御披露になり、また御奉讀になりました村雲尼公祝下の御祝詞は、誠に難有事でありまして御一同と共に感激に堪へぬ次第であります、尼公祝下の御歌に

と云ふ難有い御歌があります、今日私が申し上げ様と存じますのは、畢竟此の御歌の御意味に過ぎぬので、敷島の日本心に融合したる御佛の教を日蓮上人が御開顯遊されたのであります。

私の演題は「神道」と「日蓮上人により開顯せられたる佛敎」の事に就て申し上げ様と存するのであります、私が今爰で神道と申しますのは、世の所謂鈴振り神道の意味ではありません、夫と同様に今茲に日蓮上人の佛敎と云ふのは、決して大鼓を叩へて御題目を唱ふるを以て能事終れりと考へる様なドンドコ法華の意味でもありません、如斯申上げますと、何となく鈴を振たり大鼓を叩くのを非難するが如く聞へるのであります、決してそうではありませぬ、神鈴を振る音が鶴蒼たる森林の静かなる空気を破つて聞へるなどは、確かに人をして神聖を感じ人をして心中の邪念を一掃せしむるが如く感じますので、拍手の音などは何とも云へぬ神々しさを覺ゆるのであります、御題目や大鼓もその通りで、何となく積極的な活動的なさうして亦雄大な男性的の觀念が、油然として一種の信仰心と共に起きますので、是を消極的な鐘聲に比べますと雲泥の差が御座ります、昔からの戦争でも大鼓は攻める時の合圖で積極的でありますが、鐘は退く時の合圖で消極的である、之等實に能く自然と調和致しまするので、鈴や大鼓を用ゆるとて決して非難すべきでないのであります、私の今申しますのは、形式に囚はれたる神道や日蓮敎を謂ふのではない、神ナガラ之道と日蓮上人の開顯遊された一種の崇高なる佛敎上の意義とを擧りて、私自身の信する所を申述べ様と存じますに過ぎぬのであります。

一體この神ナガラ之道と申しますのは、天地自然の運行其まゝの道でありまして、其處に何等の議論も理屈もなく平々坦々たる大道でありますので、我御國體の淵源は實に此所に存するのであります、何も態と事を構へるのではなく、何も天地自然の理を解剖して小六ヶ敷い道理を付けたり秩序を極めたりするのではない、君臣の關係も自然に出来たので、何等の人爲的細工を施したのではない、父子の關係も兄弟の關係も亦其通りて其間に何等の理屈もないのである。

私は我國の古典には殆んど門外漢であります、私の承知致して居ります範圍内に於きましては、本有自然の姿に一種の靈力、則ち信仰中心となるべき本尊を籠めて居りますので極めて能く包容的に而かも極めて能く統一されて居るので、之等は皆一種靈妙なる神力に對する信仰心を中心として何等の理論も何等の紛争をも許さぬ點より涌き出でたる極めて崇高なる而かも純潔なる思想より打ち建てられたる如く見ゆるのであります、特に此の一種の靈妙なる神力に對する觀念は極めて盛んでありまして、如何なる事も皆此の神力に依て決定せられ判斷せられる如く見ゆるのであります、例を引くも畏れ多いのであります、我御皇統は一系不變にして永き歴史を有するが故に、崇高なる靈威ありと云ふが如き理屈めいたのではなく、皇統一系は本有の靈氣、則ち過去にも生じたるにあらず、未來にも滅すべきにあらざる大靈力の自然的作用である、則ち天地自然の道の發動であると云ふのが神ナガラ之道の思想であるのであります、君臣父子の關係は天地自然の決定で人力の作用ではない、其間に存する道は天地自然に與へられたる至情より生ずるので、人爲的の理論を挿むべき餘地はないので、是が則ち神ナガラ之道であります、親は三年の間手鹽にかけて自分を育て、下されたのであるから、少なくとも三年の表を要すると云ふ様な交換主義ではない、我を遇するに國士を以てしたので我も亦國士を以て報ゆると云ふ様な現金主義でもない、天地自然本有不可滅の情合から自然と顯はるゝ道を誰れも彼れも行へまするので、其間に何等の理屈もなく何等の無理もないのであります、言葉を換へて申しますれば、絶對の意義を有する主義

者を戴き絶対の服従を本源とするの思想より、自然と顯はれて参りとする一種の徳風を以て平和と幸福を得るの
 が神ナガラの道である、更に言葉を変えて云ふて見ますれば、理想的判断に依らずして人生の至情と純潔なる信念
 とより直覺的に必然の結果を感得するので、此の神ナガラの道は我國の古代に於て明かに顯はれて居るかの如く
 見ゆるのであります。

私は未だ如斯断言する資格はありませぬが、全體佛教夫れ自身の思想は、無明とか煩惱とか眞如とか法性とか
 云ふことがありまして、此の二つの大敵が戦争を繼續して居るので、儒教に於きましても善惡兩性の議論があり
 耶蘇教に於ても神と魔との争を見させて居るのであります、日本の神ナガラの道と云ふものには此兩面の分立を
 認めて居りませんので、唯だ單に崇高絶對なる神の威を畏み、鏡の如き靈力の發揮を信じて此の靈力の作用によ
 り凡ての穢れを除くのでありますので、如何なるものにも決して之を敵視することなく之を賤視することな
 く、一旦御疾を行ふて凡ての穢れを洗ひ清めたる以上は、如何なる者も悉く皆統一包合せられ、罪障を積み重ね
 たる醜漢夫れ自身は光彩陸離たる淨身となり最早何等の罪科を認めぬのが神隨の道としてあるのであります、而
 かも此道を支配する觀念は、則是れ萬代不變の中樞的絶對觀念で、其根元を君臣の間に起し父母に妻子に子孫に
 及ぼすのであります、要するに我神隨の道は、其本源を絶對主義の意義より發しまするので、この精神あればこ
 そ我國人は天皇の大勅宣を拜するや否や、直に死を以て大命を奉ずるの大精神が立派に發揮されるのであります
 が、この崇高なる思想は決して理論上より打ち立てられたる結果ではありませぬ、自然の感想より自然に起
 つたので其間に何等の疑義をも挿まぬのであります、この崇高なる神隨の道は、我日本の國民性の本源を成し偉
 大なる而かも純潔なる國風を生ずるに至つたのであります、段々と世の進むに従ひ世の中の事が段々と錯雜す
 る様になりましたので、力ある信仰も理論の力に弱められ段々と墮落することになつたのであります。

歴史上の事を詳論に申上ぐるには大分時間がかゝるので今日は申上ぐる事は出来ませぬが、兎に角儒佛二教の
 渡來により我國人の思想界に大なる變化を生じまして、單純より複雑に實際より理論に長閑なる様子より波瀾あ
 る状態に移りたるのみならず、我國體の根本義に若干の動搖を認むることになつたのであります、何に致せ
 一見高尚なるが如くに見ゆる理想的趣味を味ひ得たる當時のハイカラ連と、どこまでも保主義なる頑固連との
 争闘は必然の結果として顯はれ、自然の結果として儒佛力を協せて古來の精神思想を撲滅せんと致しましたので
 其結果は理想を主とする儒佛は自然の情操を主とする神道に打勝ち中世時代の思想を造つたのであります、この
 間の消息は先最初に敏達天皇の御事蹟として日本記の傳ふる所に依りますれば、佛法を信せずして文史を愛すと
 云ふので此時代では儒の方が勢力があつたのであります、夫れから用明天皇の御事蹟には、佛法を信し神道を尊
 ぶと云ふ様子に見えますが、是は理想としては佛法を信じつゝ、神ながらの道をも尊敬すると云ふので少し不明
 瞭の如く見ゆるのであるが、この際には佛教は既に思想界を征服したのであるうと思はれます、今度は孝徳天皇
 の御代になりまして其時代の事を見ますと、佛法を尊び神道を輕んずと云ふことになり佛法が全勝を得たので
 あります、何に致せ、我國人の思想は相當年月を経るにあらざれば全然變更する譯には参りません、初めの
 間は依然として現實主義でつまりは世を濟ひ民を利すると云ふにあるので、哲學めいた研鑽よりも現實的觀念の
 方面に向て進歩致しましたので、抽象的な信仰に依つて安心を求めますよりも、寧ろ佛法と云ふものは現在に
 幸福を與へて下さるものである災難を拂へ除けて下さるものである、貧乏人も金持になり病氣も癒して呉れる運
 の悪いものも良くして下さる、萬事につけて救ふて下さると云ふ鹽梅で佛様を信じ伽藍を建てさへすれば、以上
 の功德が積まれて罪障は直に消滅する、加之自己の悔悟よりも寧ろ拜佛によりて幸福を得らるゝと云ふ様な惡思
 想をも養成することになりましたが、この間に行基菩薩の様な方々が佛教の先覺として顯はれて参りまして、教

世済民を物質的に行はれ橋を架け道を開く等に大功がありました。此活如来様の間に御國體の淵源たる大切な大意義が紊亂の端緒を起しましたので、其近きに至りては、現神たる天子を以て三寶の奴と稱せしむるに至り、我無上崇儼なる特種の大意義を有する御皇統を妻子珍寶及王位の王位と同視するの大妄想に陥し入れましたので、上流の風儀も僧侶の跋扈と共に亂れて仕舞ひ、其内には不都合極まる亂暴な僧侶が多くなり、終には御國體を危ふし奉るべき場合となり、僧と云ふ者は御祈禱をするもので御祈禱が上手で讀經の聲が清くて居りさへすればそれで宜しい、社會の上流に立て威福を肆にし上下の風儀を紊して差支ないと云ふ様な傾向になりましたので、我日本國の思想界は殆んど極端に墮落し、有史以來未だ嘗て見ざるの暗黒世界を形成して仕舞ひました、僧侶の害毒は稱徳天皇時代に於て其極に達したので、是れより後佛教は稍や衰頽の色を顯はし一時不首尾の體となつたのでありますが、傳教弘法の如き名僧が御出になりました、殊に此際傳教大師によりて弘通せられました法華經の如くなりまして、再び大繁盛の有様と相成りました、殊に此際傳教大師によりて弘通せられました法華經の如きは、殆んど上下を通じて尊崇せられたのでありますが、如何せん時機未だ熟しません爲に御國體の眞意義とスツカリ融合致しませんので、反て御國體を危ふすべき弊害を貽されたのであります、此時代に於ける佛法の勢力の偉大なるは實に驚くべき者で、眞言宗の如き殊更不都合なる結果を作したのである、則ち宮中に偉大なる勢力を及ぼし清和天皇の如きは酒醴鹽を御斷になり、魚類なども絶て御用になりませず殆んど斷食の如きことを遊ばされ、三日に一回の粥を召さるゝと云ふことに御成遊ばしたので、竟に御衰弱の餘り御崩去になつたとさへ傳へらるゝ有様となりたのであります、如斯隨分如何はしい事が段々と増加して参りましたのであります、要するに唯だ唯だ消災除厄を目的とし現世に幸福(事ろ清淨ならざる幸福)を得んとのみ勉めましたので、人情は日に月に墮落致し國風は無下に賤くなり、眼前の快樂と現在の執着に魅せられ、轉迷開悟などの意味合は夢にも見る能

はざることであつたのであります、其内、法然上人の如き大徳が御出になり、現在執着の念を拂ふて呉れましたが佛に對する思想も一變致しまして今度は極端より極端に走り、現世を厭ひ西方淨土に往生せんとする抽象的、一方に傾いて仕舞ひ、この大切な日本國を穢土と唱へ、一日も早くこの穢土を離るゝのを無上の幸福の如く考へる、とになつたのであります、この際に於ける法然上人の大功は充分に後世に傳ふるの價値ありと私は信ずるので、つまり現世執着利福貪着の熱病に罹り不都合の限りを盡さんとする國民を救ふべき解熱藥として淨土門を開かれたのであらうと考へますが、如何せん、法然上人は御國體を充分に御了解なく神ナガラ道の存在を軽く見られたかの如き鹽梅で、天照皇大神の神勅と祝辭、則ち我帝國は絕對にして無始無終の意義を體現する帝者を戴き終には精神的に世界を統一すべき資格を有する國柄である、神ナガラは我日本國の中心として世界に弘通せらるべきものである、從て我國土は決して穢土ではない、我國家の爲に身命を擲て御奉公するのは、我國土を莊嚴して常寂光土たらしむる所以である、今は成程穢土の如とき體裁であるが、假令へば雲に覆はれたる日月の如く我國性の崇高なるは依然として變ずることはないと云ふ點、此點は大蒙古小蒙古の言ひ顯はしに依つて日蓮上人が明瞭に仰せられてあります、この大切な意義には着意せられて居らるので、つまりア、云ふ教義を流通せしめて國民全般を悲觀的な消極的なフツメを叩へてメロコマなければならぬこととして仕舞はれたのであると私は考へるのであります、併し元來佛教と云ふものは如何のものでありましょうか、果して神道と矛盾するものでありましょうか、矛盾すればこそ佛法を尊び神道を輕んずることになるのであります、それは果して正しい事でありましょうか、それとも雙方に於て何かの誤解か或は解釋違の爲に反對になるのでありましょうか、是等の事に關しては大分慎重なる研究を要するのであります、要するに神道は神道の本義を忘れ、佛教は佛教の眞意義を傳へずして、雙方とも皮想的の觀念に依つて相反剋したので其過は雙方にあるのであると信じます

る、何に致せ、私の信する所に依りますれば、法華經は我御國體の解釋とも稱すべきもので、殊に壽量品に於て其意義が明瞭に考へられますので、神ナガラの道は則ち法華經に依つて説明せられて居ると私は信じます、則ち法華經の意義は理想上より見ますものと事實上より見ますとの二ツにならうと思ひますが、理事の二方面より法華經を解釋せなければ複雑なる頭腦に深刻なる信仰を興ふる譯には参りません、如何なる藥でも用様に依つて毒にも藥にもなる様な譯で、我國民も太古時代に於ては現實方面のみで満足なる安心を興へ得るのであります、哲學的思想を購課せられたる面かも國體と相容れざる邪路に向て進みつゝある時代にありては、理想上より之を説明するにあらざれば到底満足なる結果を得ることが出来ません、然し如何に傳教大師の如き高僧が御出になり、理の一念三千とか事の一念三千とか云ふて見られた處が、其の説たるや理の一念三千を脱せざる以上は、理想を超絶したる神ナガラの道と融合し充分に我國民性を發揮して神ナガラの道を圓滿に行ふ譯には参りませんので、法華經を以て我御國體の説明なりと信する迄に我國民の觀念を進むる譯にはどうしても参りません、佛魔兩立を允さるる法華經の本義が如何に包含的であるかを感得すると同時に、我國體は則ち法華經の本體である、我國體の有する使命は則ち法華經の使命である、我國體の研究は則ち法華經の研究であると云ふ様な雄大な思想がありさへすれば、神道と佛教とは正しく相一致するのであります、之を教へる人がなければ何うしても神佛の融合統一を見る事が出来ませぬ、然るに我天祖及釋尊の御垂教は日蓮上人に依つて解釋せられ、日蓮上人の開顯せられたる佛教の眞意義は正しく神ナガラの道と相合し、事觀第一の神ナガラの道は日蓮上人に依つて開顯せられたる法華經に因り理事ともに圓滿に具足せられつゝ、我日本國に顯はれ、我帝國の使命が彌々益々雄大にして好望なるを證するに至つたのであります、是等の意義は日蓮上人の御遺文を研究致しすれば明瞭に認めらるゝのであると私は信じます、上人の右の意義は尙詳細に申上度存じますが、時間の制限がある

ので之位に致して置きましようと思ひます、併し是だけでは何となく物足らぬ如く感じますので天晴會員にあらざる方々の御参考として上人の御遺文中、右の意義に關し適切なる判斷の一助ともなるであらうと思ひますので、披幸致しました聖語を御聽きに達しようと思ひます。

▲我日本國は一圓浮提の内月氏漢土にもすべし、八萬の國にも超へたる國ぞかし (神國王抄)

▲佛法必ず東土の日本より出づべきなり (顯佛未來記)

▲日本一州圓機純一なり (守護國家論)

▲いたう天の此國ををしませ給ふゆへに大なる御いさめあるか (四條金吾御書)

▲一圓浮提第一の本尊此の國に立つべし、月支震且未だ此本尊をしまさず (觀心本尊抄)

▲日本一州は印度震且にも似す一向純圓の機なり (中略) 純圓の國を權教の國となし、醍醐を嘗むる者に意味を興ふるの失、誠に甚多なり (念佛無間抄)

▲本地久成の圓佛此世界に在せり、此土を捨て、何れの土を願ふべき (守護國家論)

諸君、若し日蓮上人の是等の御遺文を拜讀致しすれば、上人の心は正しく神ナガラの大道と融合し、理事兩方面より解釋せられたる御國體は正しく法華經と一致し、我日本國は實に法華經を色讀しつゝあるを感嘆せられ茲に前代未聞の大法門を開かれたのであると私は信じます、何に致せ、天晴會は僅かに三年の星霜を経たばかりで、我々如きものは如何に奮發致しましても到底思ふ通りの美果を收むることは出来まいと思ひますが、こゝに御集りの諸君と共に「神ナガラの道」と「日蓮上人によりて開顯せられたる佛教」とは正に同意義である、この道にあらざれば我國民の天職を盡しつゝ御國體を擁護し併せて一同の安寧幸福を得ることが出来ない、何うしても是でなければならぬと云ふ事を信じましたならば、この思想は不知不識四方に弘まり大目的を達することが出来様と思ひます、幸に今年の子の歳でありますから鼠算の如く同思想の人の増加するを希望して已まざる次第である。

在島三年

(天晴會記念大會に於ける)
講演者 三上生華記

文學博士 姉崎正治君

本日は天晴會の創立滿三週年記念大會であるから之に因んで在島三年に就て申上げ様と思ふ。

在島三年とは、即ち日達上人が第二の國諫を進めて幕府の忌諱に觸れ、龍の口に於て斬られんとしたが赦免に逢ふて佐渡に流されし文永八年九月から、同十一年三月赦を得て鎌倉に歸らるゝまでの三年間を云ふのであります、本日本會の三箇年を迎ふるに當りて直ぐ聯想するのは上人の在島三年の生活である、上人の著述や文書の上に現はれて居る分量から見ても、在島三年間に莫大な事業を爲されて居る、佐渡以前の著作は縮刷で七百頁餘りであるが、佐渡の三年間に著作されたのは其二倍である、從て在島三年は最も重要であると云ふことが解る、而かも塚原の三昧堂に於て用紙を

分が未法の衆生を救ひ無明甚重の闇を除くために、佛勅に應じて現はれるものであると云ふ自信の起つた、之が則ち新らになる生命ある生活に入られたのである上人は此自覺を以て雲煙縹渺の間に佐渡の孤島を眺めたのである、之は『寺泊御書』に明白に表はれて居る、既に此自覺に起られた上人は、安房の國の人の子にして止まるべきでない、上行の再誕として我日本國を中心とし一闡浮提を感化すべき重大なる責任の實行に進まれたのである、「開目抄」は佐渡に於て初めに作製せられたものであつて、破壊的の如く見ゆる文字はあるがそれは決して破壊的でない、則ち全體の締め括り爲め總てを包容せんが爲である、また有名なる『觀心本尊抄』は其教義の眼目綱領を顯示せられしものである、「如説修行抄」は行者の心得を教へたものである其他にも多くの著作はあるが三書に比すれば註釋とも見るべきである、已上擧げました『開目抄』や『本尊抄』や『如説修行抄』は上人の主張信條を傳ふる不朽の名著述である。

求むるにも非常な困難を感じ、雨露の漏る位びしき生活の中に於て之れだけの事業をせられたので、如何に苦心慘憺せられしかい想像せられる、而して其内容に於ては一代の中樞であり正宗分である、初め上人は學問的の修行であつたが、末法行者の舞臺が開かれて奮闘的修行に入られた、伊豆や鎌倉の法難は則ちそれである、而し之は未だ序分である佐渡の三年間が本文である、上人は自から文永八年九月十二日龍の口に於て、頸刎ねられ終んぬと云はるゝ如く、佐渡時代の上人は新たな生命ある生活に入られたのである、茲に新たな生活と云ふても單に新らしいと云ふ意味ではない、新らしい生命は之れ變て古い「吾人の算へされぬ昔からの生命である、安房の國佐渡の國に生れたのが始めていない、即ち五百塵點切の昔からの存在で本化上行の再誕である、法華の會座にも列なつて居つたと云ふ自覺である、未法の衆生を濟度するときに若し其人が生れなかつたならば、佛語は皆虛妄となつてしまふ、然るに數十年間多怨難信の經過を顧みれば、自

然らば轉じて在島三年間に於ける上人の精神状態は何うでありましたか、或人は上人の精神状態を批評して矛盾があると云ふ、其一例は在島三年に在りとし、一方には上人が上行の再誕であると云つて誇大妄想とも思はれる程の意氣込であるが、一方では又罪障の凡夫であると云ふ様なことを云つて元氣消耗の風があるではないか、之は確かに矛盾ではないか、若し上人が上行の再誕であり夫程尊い使命を帯びて出現したのであるならば、諸天善神は守護して居るべきであるが、現に流罪の身となりて佐渡に居るではないかと云つて矛盾であると批評をするが、決して之は矛盾ではない、平凡な見地を以て推せば矛盾の如く見ゆるけれども、偉大なる人の心と云ふものは、凡てを包容し統一し調和して居るので少しも矛盾の點はないのである、例へば加藤清正は鎧を持って征伐に行つた人であるが、どんな子供でもなづくると云ふ温かい所があつた、清正が鬼將軍と呼ばれる、方面と子供もなづくると云ふ方面とは、能く調和されて居つて矛盾して居らない、其矛盾

と見ゆる所が一切を包容すべき偉人の大なる性質である、上人に於てもそうである、我は日本の柱なりと云はるゝ上行の自覺と、罪障の自覺とは決して矛盾すべきでない相一致するものである、何となれば上人の云はるゝ罪なるものは普通の意味ではない、一切衆生の罪を一身に引受けて居らるゝのが上人の罪の自覺である、それ故に上人の罪の自覺は即ち上行の自覺であつて、此二は表裏兩面異なるものではない。

凡そ佛教の世界観より云ふならば、無垢の状態に居るものはない、徳川時代の道歌に「傀儡師くびにかけたる玉手箱鬼を出さうと佛出さうと」と云ふ事がありますが、人は皆斯の如き靈妙にして危険なる精神を存して居る、一たび其佛性を開發し來れば、世間で云へば智能を啓發し徳器を成就し自分の心性を發揮するものである、初めから悪人もなければ善人もない、之は人間の人間たる所以である、而して一旦罪障を罪障なりと自覺して來れば、善の方に向上して居るので罪は惡を折伏して征伐して行かねばならぬ、大に善に

日蓮上人の御尊容と婦

人の修養

(一月二十一日青山安川邸に開催せる地明會
講演會に於ける講演大意也 三上生記)

東京美術 學校教授 竹内久一君

私は日蓮上人の讃仰者であつて宗教の學者でない、法華經の講釋をする爲に本會の講壇に上りた譯でありませんが、私は藝術家でありますから其方面より日蓮上人の御尊容に就て發見致しました點を御話して見ようとおもふ。

日本佛教界には高僧と呼ばるゝ人は多いが、日蓮上人の如く艱難苦痛を嘗められ身命を失ふと云ふ場合のあつた人はない、而かも斷頭場程に在ても雪の地に於ても少しも恐れずに喜て笑て法の爲に盡して居られたことは、誰人でも敬服する所でありましようが特に私は私の性情として崇敬の念を深ふするものがある、元來私は幼少の時より日蓮上人は佛教各宗を通じて第一

進まんとするならば大に惡を折伏することが必要である、外に向つても内面の心にも大折伏を行ふべきである、之が上人の罪滅の自覺である、それ故に上人自から在島三年の罪障云云は劍持の思ひで云つたのではない、世界には惡魔が横行して居るから之を折伏して滅ぼさなければならぬ、則ち惡と善との戦である、而して今末法の時代は多怨難信であるから迫害の襲來するは必然の結果であるが、迫害に當りて辛酸を受くることは喜ばしいと云ふのが上人の自覺である、佐渡で著

はされた「呵責謗法滅罪抄」に

法華經の御ゆへに已前に伊豆の國に流され候しも、

かう申せば謙ぬ口と人はおぼすべけれども、心ばかりは悦び入て候き。

と述べられてあつて上人の心血が表はれて居る

それ故に日蓮主義を奉ずるものは、上人に於て示されて居るが如く、一面に於て如來の衣座室にあるの自覺あると共に、今申述べた罪障の自覺がなければならぬ、吾人は如何なる場合に處しても、上人の所謂甘露の涙を聞いて法悦を味ふて行かねばなるまいと思ふ。

の偉人であることを知り、且つ立正安國論などで非常に豪らいと考へて居りましたが、二十三歳の時、遂に日蓮上人の尊容を刻まんとの大志を抱きました、而してそう決心しますると、善にして美且つ眞實なる標本を得たいと思ふて傳記書類を調べて見ました、處が小川泰堂氏の眞實傳から、更に遡つて元録年間の記録に依り日法上人が祖像を刻まれたことを知り、又更に元和時代に至り註書讀めるを知ることが出来ました、私は當時何となく胸中の雲晴れて光明に接したる思ひして喜びと勇氣とを起しました、則ち御弟子日法上人が祖像を刻んだことが判明致しましたから、其實物の祖像の在所を探し、一方では史的研究を積みたいたと思ひまして、一切の用務を抛つて舊蹟を訪ひ専ら關係書類を撰擇して多くの資料を得ました、而してこゝに一つ特別なことは、私法も法然も乃至各宗の祖師は、自分の弟子に自像を刻ませたる例はない、全く弟子が祖像を刻んだと云ふ例は、唯だ獨り日蓮上人のみである、而して日法上人已後、祖像の彫刻を爲したものを

ない、如何にも残念な次第であるから自分は奮然起つて第二の日上人たらんことを期せんとした、時恰かも日清戦争の折柄で筑前の博多に銅像を建設することとなつた、此銅像建設に際しては是非自分一人の手を以て熱誠事に當らんと覺悟し、美術學校に交渉して自分が引受くることになつた、三丈五尺といふ大なる銅像は日本には唯一つであります、是れは蒙古調伏の記念として建設したのであつて、蒙古の軍勢に對して精神的に睨み還す程の體相でなければならぬ、或る工學博士が世界第一の悪銅像であると評論を試みたそうだが、何も知らん人が悪と見るのは結構である、吾々美術家が上人の御像を作るには充分の注意を拂はねばならぬ、何にも知らず矢鱈に書くのは不都合である、例へば觀音や不動や愛染は歴史上人格を有せる菩薩等であつたかは、充分の調査を遂げなければならぬ、日蓮上人は房州に生れて日本國中に活動せられたる偉人である、此偉人の尊像には必ず體相性が完全に具備せなければならぬ、性の上には信仰が法華經と融合して

法然上人はさい槌あたまであるが、上人は頂か少し高ひ、是は三十二相中の肉髻を表して居るのである、頂が平たくとも窪んで居てもいけない、肉髻でなければ偉い方ではない、釋尊の頂頭は高かつた、それを舍利佛が見やうと思つて種々の工夫をしたが、遂々見ることが出来なかつたと云ふ事があります、日蓮上人の頂頭には大覺世尊が宿りて居るから、法然一輩と異ふのも無理はない、鼻は筋が通つて居て、孔は小さくして丸さがよす。

齒は經文の如く密で揃つて居たに相違ない、ツツ齒ではいけない。

眼は大きくして長いのが善い、青蓮華の如しとある様でなければならぬ、眉は柳の如しと云ふ様になつて居なければならぬ、それは茲に掲げてある中山の水鏡の御像と云ふのが、柔和にして而かも品格があり慈悲に満ちて居るといふ風があつて如何にも善いと思ふ。

耳は大きい、如何にも福相の様に見える、印度の佛像は多く耳が大きい之は瓔を下げる爲であつて、上

居るので、何れより拜するも莊嚴美に打たる程でなければならぬ、御遺文に佛は三十二相なりとあるが其一つはどうしても出来ぬ、則ち梵音聲は形を以て見ることは出来ない、之は梵音聲により殘されたる教と像とを結び付けて信仰を持って御像を拜まなければならぬと信ずる。

上人御着用御袈裟は五條である、いま日蓮各派に於て着て居る七條ではない、七條は鎌倉時代に禪宗の僧侶が支那から持つて來たものである、故に祖師入滅已後、百年にして中山と真間とか七條法論を聞つたと云ふのでも解る。

上人の御面相は能く解らない、是は上行菩薩の再來なのであるから、先づ涌出品等の經文に依つて考へるが適切であつて、則ち三十二相を自然に備へて居たものと信すべきである、そうして房州に生れたる上人は日本人として美男子であつて、男らしき大丈夫であらせられたこと、信ずる。

頂頭は、古來から法然あたま日蓮あたまと云つて、人の御耳とは其性質が異からう。

丈格好は種々考へたが、先づ高からず低からずとして並よりは大きい方であると思ふ。

身體の肉附は、是まで存在して眞蹟又は御像に依て考定するより道はないが、御書きになつて居る御題目を見ても何となく肉があつて肥へて居るやうな感じがする、どことなく圓滿な有様を思ひ浮べる、殊に蓮華の華の字などを觀ると顔を書いた様だ、文字に依て御容貌を推量するのは少し如何はしいといふかも知れぬけれど、大に参考にして好いと自分は信じて居る。

それから持物は、是まで各寺院等にある所の祖像は皆「笏」を持つて居るが、此笏の事に就きましては種々研究して見たが、是は禪宗で提唱の時などに打つ爲に用いたもので、法華の方には用はない、註書讀の一寸見ると笏の様にも見へるが、之は櫛扇である、けれど史實の確かなのは拂子である、池上の御靈寶の中に、現に御雨親のおつむりの毛で作られたのがある、私は日露戦役の時に記念の爲に造つた御像には、古來

多くの有來りの笏を廢めて拂子を御持物と致しましたのであります。

吾々は今茲に掲げてあります御尊容を拜し、まして何とも言へぬ偉大なる靈感に打たるゝの思ひが致し、する、日本に偉人と呼ぶるゝ人は多いが、其像に接して精神の底から崇敬の念の起るものは甚だ少ない、獨り日蓮上人は福徳圓滿の形相を備へて居つて一見容を改め襟を正ふせざるを得ない、而して上人讃仰者は上人の尊容を知らねばならぬ、堂々として而かも優さし、上人の高風尊容を朝夕に拜して修養を勵み信仰を進めなければならぬ、特に日蓮主義の婦人は、懐胎してよりは南無妙法蓮華經の信仰を以て鍛へこみ、朝夕上人の尊容を拜して其徳風を慕ひ、上人の人格が胎中より養成せられて生れる様に致したい、生れてから達磨の様に九年も經たねば歩き出せない様では困る、どうか婦人は尊容を拜して自然の内に上人の人格を感得して戴きたい、昔しから妙に物にアヤカルと云ふ事があるが、鳥を料理して居るのを見てお腹を掻けば、鳥の

折伏逆化

(天晴會記念大會に於ける講演の大意也 三上生記)

東洋大學講師 境野 黄洋君

私の演題は「折伏逆化」と云ふのであまりに激烈の様に見えるが、而し御話する内容は上人の折伏の意義を闡明にせんとするのであつて、慈悲の大精神より突發したる逆化の問題である。

日蓮上人が法華經を弘めたと云ふが、之に對しては考へ方が種々あると思ふ、上人は人生の事實として法華經を御覽になつたので、釋迦と云ふ印度に生れた人の法華經でない様に觀察せられる、人生の根本義である法華經にして研究物ではない、然うであるならば印度に生れた釋迦と云ふ人格が法華經に乗り移つたものとおもふ。

彼のガンゴス川の洋々たる水は、餓鬼は火と見人は水と見天は淨瑠璃と見る、或者は御經に對して白紙に

顔に似た子供が生れる、火事を見て搔けばアヤとなる石川五右衛門の親は五左衛門と云ふのであるが、其妻密かに神様に祈りをかけた、山の中洞の穴に祭りてあつた神様を信じて祈りをした、其洞穴に祭りたものは袴垂八十助であつて四天王の子分の盜賊であつたのである、亦現に私の知つて居る範圍でも、盲啞學校開設以來校長を勤めて居る小西信八君は、二人の子供は何れも可愛相に啞である、小西君は盲啞教育に興味と熱誠とを以て此の事業に全精神を傾注して居るのは世人の知る所であつて、從て夫人も盲啞の兒童のみに接して居るからであると思ふ、この現在の事實より考ふるも、婦人は觸向對面一段の注意を拂はなければならぬ、凡て悪いものは廢して上人の如き圓滿なる尊容を拜することが大事であると思ふ。

黒い文字を書いてあるに過ぎないと見るけれども、我輩は三千年前の釋迦に對して直接に血肉の温みに接し人生の根本義たる教を聞くが如くに感ずるのである、抑も眞正の法華經とは何であるか、所謂法華經の經體とは、父母より受けた此の肉體に於て法華經の精神を行ふて行くことである、則ち「當體義抄」に父母所生の肉身是れなりと云ふてある、法華經の經體は吾人五尺の肉體それが法華經である、而し吾人自身が經體ではあるが、上人は弟子權那と云ふ制限を與へて居る、それ故に上人の精神と活動とを心讀し體讀せなければならぬ、今日の時代は法華經に對する哲學上の研究が盛んであるが、身に法華經を行はざれば當體ではない、身に行ふと云ふ事より進まなければならぬ、法華經は讀誦又は單に研究的の理論でない、身に行ふものである、而らば如何にば宜しいか、佛とは何ぞ、理屈の方面より言はゞ多義を存するならんも、一言にして言はば全體を擧げて慈悲である、慈悲とは一切の人類を救ふ爲に大道の基點に立て自己を犠牲に供し得る事が出

來るものである、法華經を讀むと云ふことは慈悲を行ふと云ふことである。

上人の一代に就ては千百の評論がある、英雄とか豪傑とか果斷とか愉快なる傑僧であるなど、言ふのは根本的に間違つて居る、單に活動的にして愉快なりと見るが如きは半面を知て全體を知らざるものである、上人六十年の生涯は慈悲と涙の生涯である、上人は四個格言を唱へて猛烈なる折伏を試みたが、上人は敢て敵を作りて戦はんとしたのではない、折伏逆化と云ふは確かに佛の慈悲より來るものである、上人は常不輕菩薩の後を繼承して折伏逆化を行はれたのである、皮想論者の云ふが如くそれ議論で來いと云ふて鎌倉の僧侶を集めんとした譯でないのは言ふまでもない、彼の「選時抄」に時を知ると云ふてあるが、此法華絶對の教を弘めんとするには必ず多くの迫害が起つて來る、他宗教の一輩は敢て相手にする程のものではないが、而れども念佛無間の聲を擧げて叱咤の警鐘を打つたので、一大注意を惹いて鎌倉天下の問題となつたのである、

て、遂に「開目抄」の

我日本の柱とならん

と自覺的宣言をなされたのである。

要するに上人の折伏逆化は、血と熱と涙との結合であつて社會の人が解して居る様な浅い意味でない、若し現代の人が上人の研究に志して進むならば、必ず光彩陸離たる大偉人の人格に接觸して、多大の教訓を得て感謝と敬意を表するに至ることゝ信するのであります

日蓮上人云く

日蓮が一類は異體同心なれば、人々少く候へども大事を成じて、一定法華經弘まらんと覺へて候、惡は多けれども一善に勝つ事なし

(縮造一〇五五頁)
異體同心抄

則ち反對を作りて弘法の形式を得たのである、折伏逆化は戦を手段として布教方法を取りたに過ぎぬ、國家の危急を救ひ國民思想の覺醒を促がすべき大慈悲の涙が溢れ出でたる折伏である、上人は一個の日蓮としては瑣末の事柄をも考へて居られたが、亦重大なる天譴を遂行するに全力を傾注して居られたのである、「諸法實相抄」に

現在の難を思ひ續くるにも涙、未來の成佛を思ひて喜にも涙せきあへず、鳥と蟲とはなけども涙をちす、日蓮はなかねども涙ひまなし、此の涙世間の事には非ず但偏に法華經の故也

實に上人の心事高潔にして一點の私がない、慈悲と涙の結晶である、勸持品に説ける惡口罵詈等の厄難を甘受して大活動を爲されたのは、法華經の文々句々悉く眞實なるを身讀して證明せられたので、上人に依て法華經は益々空理空文でない事が明瞭になつて來たのである、そうして上人自身の天職を自覺したるとき、其安心と決心とは宗教的大偉人の面目日本義を發揮せられ

時

評

大略を要し
迷情を去れ

神佛耶三教會同に就て 三上白碧

内務省の計畫せられたる三教徒の會同は、大に世論を喚び起して各方面に賛否の聲が高まつて居るが、我輩が其反對の理由を觀來れば一ツも合點の行くものがない、多くの各宗管長及代表者は、官廳が何等の制裁を加へない基督教徒と會同せしめて、同一の責任を賦課すると云ふのは公平を失して居ると云ふのであるけれども、或る善良の形式に依りて責任の量が増せば増すほど、宗教家自身の天職の偉大なるを自覺し、其宗教の本義を發揮して國民風教の向上に資するではないが、今の宗教家は一或未斷の荒凡夫のみではあるが、而し半面には大なる佛陀の格を持つて居る筈である、茲に新しい問題を善いか悪いかを詮議するは良いが此の問題に囚はれて仕舞つて、其問題を包容し融化する位の精神がなくては、成立教團の現状維持は出來やうけれども、國家及國民思想の指導を遂ぐることは出

来ない、ことに三教會同の理由の如きに至ては床次次官の公表意見を一讀すれば、直ちに時代の進歩と宗教の關係とが解る筈である、我輩をして皮肉に言はしむれば、故意と臆病と小感情とを捨て、眼を大局に注がば、必ず其會合すべき理由は直ちに諒解するであらうとおもふ、床次次官の意見を觀よ。

(一) 宗教と國家との結合を圖り宗教をして更に權威あらしめ國民一般に宗教を重んずるの氣風を興さしめんことを要す

一國の文明は物質と精神との兩方面が相伴ふて發達せなければならぬのは勿論であるが、現代の教育施設にては智育の方面は稍や完備して居るが、德育問題に至ては健全なる發達を缺いて居る、而して之は社會教育上の力を藉らなければならぬのであつて、則ち宗教的靈力に倚らねばならぬ、或る論者は教育と宗教とを混同するは不可であると云ふて居るが、固より兩者は明かに截然たる區別があるので、政府の方針として何も教育の中へ宗教を交せようと云ふのではあるまいと思ふ

可いと思ふ、要するに宗教事業に従ふものが互に相接近し意思の疏通が出来て社會教育上に貢献することがあるならば、民心の堅實なる發達を圖つて國運の基礎を堅ふするものがあるので、國家として益する所あると共に宗教家として亦快事であらうと思ふ、而して宗教の傳道事業が、國民に其効果を認識せられて宗教の尊さを知らるゝに至らば、宗教的權威に成りて道徳の基礎益々堅實となる、我等凡夫なる人は我慢偏執の念が強過ぎて常識を失ふ場合がないとも限らないが宗教家は其立脚を忘れてはならぬ、こたびの會同に就ても或宗の如きは、其教團の管長と云はずして代表者にして呉れと當局者に申出でた様だが、少しも其理由とする所が解らない、管長は其一教團を代表するものではないが、管長は其教團における第一流の先覺者であらう、それがどうして會同に列することが出来ないのか、若し恐ろしくて會同が出来ないならば、責を引いて其適任を擧げたならばよからう、我輩は宗教の本義を發揮して國運の伸張に資することが出来る

唯だ宗教と教育の二つの者が相依り相扶けて互に提携し、國民の德育風教の上に今一段の努力を索めたるに過ぎないと信ずる。

(二) 各宗教家の接近を益密ならしめ以て時代の進運を扶翊す可き一勢力たらしむるを要す

彼の基督教が管廳監督の下に立たないで自由行動が出来ると、佛教の各宗派を之と會同せしめて重き責を負はしむるのは不都合であると反對して居るけれどもそれはあまりに佛教各宗派の識見雅量が狭い、現代の基督教徒と會同し提携しても其信ずる所の主義所見に於て國運の發展に貢献することが、何が故に違法であると云ふのであるか、兎に角政府の意見を窺ひ來れば頗る明瞭であつて、其内面に何か潜んで居る様に猜疑の念を拂ふほどの問題でない、假に何か特別な問題があるとしても宗教家の大識見を以て善用したら良いではないか、我輩は唯だ此際三教者の會同が、國家民衆の全體に向つて多大の刺激を與へ、政治と宗教と教育とが互に相尊重し合つて國家の進運に資する者あれば問題であるならば、一切の我慢偏執の迷情を擱置して奮て國民運動の犠牲となることを欣ぶものである、苟も宗教家は此の覺悟と識見とを有つて居る筈だが、三教會同の事起るや徒らに迷想を走せて物論を讓し、小刀政治家式の言論を弄して誠意を缺ける舉措に出づるが如きは、紳士の風格を傷けるものではないか、よろしく宗教的大精神に任して快よく一堂に會し、各自懐抱せる案件を發表して大に論議したなら佳いではないか、須らく堂々として大丈夫らしき態度に出でよ、何ぞ女々敷振舞を爲して天下の笑を招くのであるか、政府が企てられし宗教活用の議、此機會を利用して益々佛教の陸離たる光彩を發揮するに努力せねばなるまい。

國民革正の運動史

天晴會三週年記念大會

世は滔々として物質文明に酔ひ、久しく思想の問題を輕視して敢て顧みる者なかりしが、頃來漸く天下を擧げて國民の思想界に大缺陷あるを覺り、齊しく之に注意を拂ふに至りぬ、然れども如何にして國民性を涵養すべきか、混然たる思想を統一すべきか、今なほ具體的成案に迷ふものゝ如し、蓋し此事たるや、正しく一國の興廢に繫はる重大なる問題にして、國士を以て任する者は深く根本義に對つて慎重の討査を積まざる可らず。

天晴會は、曩きに王佛冥合の日蓮主義を奉じて諸般の缺陷を救治すべく、其綱要を天下に示してより爰に三週年、爾來日蓮主義の主張理想に崇敬の念を拂つて集まるもの日に益々多く、朝野一流の名士競ふて會席に列するを幸榮とし、敬虔なる態度を以て日蓮主義の

方支部及日蓮鑽仰の各團體には洩れなく案内狀を發し、特に東京各新聞社には國と道との爲に參會を促がし、準備整頓して遺漏あるを見ざりき、當日は朝來天麗かに地靜かにして佛祖の靈威ありしものか、何とのう天晴地明の聖語を繰返さるを得ざりき、午前九時柴田幹事安川繁種君を先頭として小笠原丁君佐藤大佐三上白碧新宮主計官天野辯護士松本幹事詰めかけ來り會場其他の整頓を告げて時針十一時を報するや、會員及一般聽講者は潮の襲來せるが如く、用意せる千貳百足の上草履は午報の時一足も見へざるの盛況を呈し、受付係は遂に自ら穿ける草履をさへ聽講者に給するまでに至り、遂に入場謝絶の文字を掲げたりしが、何條そうですかと言つて歸るもの一人もなく、草履なければ足袋の儘にても差支なし、此の清き會場に入りて講演を聽くを得ば以て満足なりとて、素足袋にて場に入りしもの六百を算ふるに至り、さしもの廣き大講堂ももはや立錫の地なく、已むなく入場を斷らざるを得ざりしかば、何れもあゝ一刻遲そかりしよなとて悄然と

研鑽に入り、いまや日蓮主義の活教訓に憑りて思想の危殆を回宏せんと欲し、「夫れ經文の如くならば隨力演説も有るべきか」の聖訓を色讀し、國民革正運動の熱烈なる戰士を出すに到れり、大聖日蓮は「若黨其二陣三陣と續けよかし」と激勵を與へ、「日蓮が末弟は憶病にては叶ふ可らず」とて戰士の資格を決し、王佛冥合の理想實現のために討死を爲さば、「釋迦多寶十方の諸佛須臾の間に飛び來りて手をと肩に引懸て靈山へはしり給はば」と宣べ給ひて、光榮ある不滅の生活を示さる、苟も日蓮主義者たるもの、奮然死を決して惡魔の軍勢と戦ひ、奮戦力闘して戰場に墮れよ、あゝ豈にまた壯烈の快事にあらずや。

いでやこゝに我黨が四十五年の天地に於て、運動史の序幕の盛觀を記さん

聖祖が太田殿消息に「新春の慶賀自佗幸甚」と宣べられし正月十四日、神田駿河臺明治大學記念大講堂を會場として本會第三週年記念大會を公開せり、先是大會準備には幹事辯護士松本太郎氏専ら之に當り、地して歸りしもの五百以上なりき。

大講堂正面には日蓮聖人御聖影を奉安し、壇上右方には松竹梅の生花を飾りて本會の理想を寫し、午後一時柴田司會者開會を宣するや、矢野大審院檢事は「天晴地明識法華者得世法歟」一念三千を知らざる者に佛大慈悲を起して五字の内に此珠を裏み未代幼稚の頭に懸けさしめ玉ふの聖語を奉讀し、會員は肅然起立して滿腔の熱誠を以て敬意を表せり、松本幹事は眞儼なる態度と莊重の句調とを以て先づ村雲尼公現下の御祝辭に對し謝意を表し奉り次で記念大會開催の要義を説き、更に進んで内は國民の思想危機に逼り、外は對外問題急を告ぐるの秋、立正安國を唱へて王佛二法の理想實現を要すとして諄々切々能く日蓮主義の理想を發揮して開會の辭に代へ、關日懿師は特に本會の爲に賜はりたる村雲尼公現下の御祝辭を代讀せらる、滿場起立して敬意を捧ぐ、次で會員總代年長者たる辯護士吉田珍雄君、妙典研究會代表辯護士牧野賤男君、日蓮聖人靈蹟保存會代表海軍中將宮岡直記君地明會代表江田綾子

女史の祝詞朗讀、各地よりの祝電の重なる者山梨縣天鼓社豐橋天晴會國友日斌君安州天晴會幹事高橋正男君外五氏子爵海軍大佐小笠原長生君岡山日蓮鐵仰會幹事能仁事一君陸軍工兵中佐岩田一櫻君等の數十通に上る、夫れより柴田幹事は講演に移るべきを宜するや、松森權僧正は満場の拍手に迎へられて登壇し、「開目抄の感讀」と題して上人一代の心血は開目抄に存するを説き、佐渡生活の當年を偲びては感涙に堪へずとて奮闘の史實を紹介し、姉崎博士は本誌に掲げたるが如く、獨特の卓論を鳴らして上人研究の材料を與へ、大僧正小原日純師は「日蓮上人の三諫に就て」と題し、立正安國論上呈の経路及一昨日御書等に顯はれたる國諫の精神を説き、佐藤海軍大佐は本誌巻頭に掲載の講題を提げて縦横の快辨を振ひ、境野黄洋君は眠りを醒ますはどなる「折伏進化論」を掲げ、獨創一流の長廣舌をいだして優さしき慈悲論にて結びたるが如きは、聽衆確かに圓轉の妙に驚けり、本多大僧正「日蓮上人の苦衷」と題し、日蓮主義は開顯統一主義也天晴地明は開顯主義

男女、特に安州天晴會より吉野喜智氏等の參會せるを見たり、何れも敬虔の態度を持して熱心に傾聽し、感極まりて我知らず拍手するの外は咳拂ひさへもなさず、一人の喧擾を極むるものさへなかりしは、模範的日蓮主義者として誇るに足るものある也。

午後七時校内の食堂に晚餐會は開かる、會するもの八十餘名、松本幹事會務を報告し、幹事總代姉崎博士は「三年の経過を追懐し現在の會員の増加は誇るに足るが如きも、退いて考ふれば未だ序分に過ぎず、十方より讚歎の四衆雲集し來りて閻浮統一の實現を期せずんば、本會の目的は達し得たるものにあらざれば前途頗る遼遠也、幸に諸君と共に此主義のために努力せむ」と述べ、其他二三の談論ありて新入會員の紹介あり。

軍令部參謀海軍大佐

野村房次郎君

美術家

森田 洪君

美術家

繁宮久遠君

日蓮聖人靈蹟保存會
評議員

關 日 懿君

也。而して上人は本尊に於て純乎たる信念に依て統一主義を主張し實行し、之を現代に傳へて國家風教の根底を與ふるの苦衷に外ならず、「鬼神亂人心亂」の經文は萬古不朽の格言にして、我國現代の思想界は日蓮上人の如き忠節の情神を知らざる可らざる所以に就て、心血凝て熱烈の大論辯を起し満場爲に酔へるが如し、小林文學士は「力」と題し、幾多諸諫にして適切なる例證を擧げて力の効果を説き、力は信仰により信仰は人生活動の主觀的源泉なりとて日蓮主義研究の熱を高め、田中智學君は人間萬事の解決を與ふる者は法華經也、而して此教が人間の歴史に織られて表はれたるもの、即ち是れ日蓮上人也、故に上人を研究せば必然法華經に達すべき所以を説き壇を下るや、時正に午後六時海軍大學校長海軍中將八代六郎君は、満場に總起立を求めて、陛下の萬歳、天晴會萬歳を唱へ、司會者は聽講者に叮嚀なる挨拶を爲して閉會を告げたり、此の日の講演正に五時間、一千八百餘の聽衆悉く袴又は紋付羽織を着用し、來會者は當代一流の名士及篤信の善

同 近江正 瑞君

實業家 大貫彦次郎君

大審院 檢事 林 頼三郎君

會員一同拍手を以て之を歡迎し、食卓を圍みながら所感を披瀝して研鑽の資料を探り、或は世の涸濁を憂へて日蓮主義者の責務を語り、識者の愚論を罵つては透明なる聖祖の判定に感合ひつゝ、和氣洋々として法悅の氣一堂に充ち、げに開顯せられたる穢土とは斯くもやあらんと思はれ、心に佛祖の絶大なる加護を敬拜しつゝ堂を出づれば、天高く澄めども衆星の微光を認むるのみ、聖日蓮言はずや、「一切經は開夜の星の如し法華經は開夜の月の如し、法華經を信すれども深く信せざる者は半月の開夜を照すが如し、深く信する者は満月の開夜を照すが如し」と、あゝいまこゝに適切な活ける教訓を拜し合掌し作禮して感謝の題目を唱ふ。

(白碧記)

豊橋天晴會發會式

豊橋の地たる由來新開地の常として宗教的色彩に乏しく數十の寺院教會は寂として眠れるが如く心ある者をして慨嘆せしむる事久しかりき昨春國友文學士來豊せらるるやこゝに僅かに一道の微光を認めぬ先は益々大に聲は愈々高く再三再四の講演に漸く日蓮上人の大人格を悟りし聲仰し來るもの其数を増し十月に入りて國友師及浦井文學士を中心として日蓮研究會を起さんと議あるに至りし。

恰も善し昨年十一月月上旬本多大僧正及高島氏來豊せられ熱烈なる聲を以て日蓮主義の眞價を鼓吹せられ甚深なる感動を聽衆に與へらるるに會せり即日議熟して研究會の組織を擴張して天晴會豐橋支部を設くるの計畫を見るに至りし時會友の發起人の燃ゆるが如き熱誠は着々準備の進歩を見發せ人會は一會に一會を重ねる毎に其計畫を擴大しつゝ遂に十二月下旬萬校の準備を了りて國友師の上京となること、支部設立の承認を得るに至りし。

こゝに於て廣く會員を募るや未だ一月に滿たざるに申込接踵して既に百十名の多きに達し其鮮明なる熱誠と堂々たる態度とは善く市人の偏見を打破してその眞精神を認識せしむるに至りし。

況の一斑を左に物せん。此日天晴かに晴れて風なく春の如くに長閑なり午前十一時發會式を豊橋ホテルに開く國友師開會の辭に次いで君ヶ代の講師長く豊川の水に湧けゆけば國友師は立ちて壯重なる態度もて御遺文天晴地明の一節を誦讀し續いて長野歩兵少佐發起人を代表して左の宣言書を朗讀す。

宣言書

世界唯一の蠻邦に生れたる大和民族は東西兩洋の文明を調和統一して世界の文明と福祉とを増進せしむべき大責任を有す大聖日蓮の偉大なる人格及主義によりて我國民に其眞精神を發揮せしめ此の大責任を成就せしめんが爲め此に天晴會豐橋支部を設け更に大に市長の式辭終りて天晴會本部を代表せられたる本多管長は敬虔なる態度にて天晴會の志趣及沿革を述べられたる來賓及會員は正し宜用して水を打ち以下の如し次いで各地より祝辭並に林中將以下の方左の祝電を朗讀し櫻井氏發聲の中に天皇陛下萬歲豐橋支部萬歲を三唱して式を閉じ紀念攝影をなし國友師の指名にて櫻井八外山芳太郎大口喜六神田徳四郎高橋小十郎長野親信上嶋萬次郎國友日城矢崎茂安井信樹櫻井祥造浦井信太郎(イロハ順)の十二氏を幹事に推舉し一同祝電を擧げたる後講演會場に向ふ祝電等左の如し

第七師團長陸軍中將 林 太一郎

天晴會豐橋支部發會式を祝し後來の發展を祈る

海軍大佐子爵 小笠原長生 盛會を祝し健全なる發展を祈る

天晴會本部幹事松本郡太郎 發會式を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝し國家の隆昌を祈る

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

豊橋支部發會を祝す

東京地明會 發會を祝す

最後に本多大僧正は「日蓮主義」なる演題を提げて縱横關河の辯を振はれ一言は一言より一句は一句より聽衆の肺腑を抉り兩堂よりして聲なく僅かに起る拍手の聲に漸く人あるを思はしむ講演終りては既に五時を過ぎぬ當日の來賓は町田參謀長加藤騎兵隊長以下文武官新聞記者等にして前古未曾有の盛會は豊橋思想界の情眼を根本より掃き去りぬ最後に本會設立に對して國友師を援けて賦身的に盡力せられし浦井信太郎服部彌八上島萬次郎長野親信神田徳四郎の五氏は今後又本會の隆昌と共に永へに其歴史を彩るものなり又本會の設立を風勵して日蓮上人を熱烈に擁護する中野野雲右衛門氏より電報爲替にて創立費の内へ金百圓を寄贈せらるる本會は謹て厚意を謝す。(會員月倉忠記稿)

日經上人記念塔除幕式概況

事は舊聞に屬すれども宗風振起の上に多大の影響あるを認めたり運れ集せながら左に報道の筆を執る事としやう、并ば外でもない千葉縣山武郡増穂村南横川山に於ける常樂院日經上人法難記念除幕式の概況である、申す迄もなく日經上人は色讀法華の偉人で四個檢言唱導の事に坐して徳川家康の盛意を受け朝則の慘刑に處せられ尚ほ且つ堂々の法鼓を絶たなかつた猛法將であつて芝居御墳山は上人が南總七里法華宗風刷新の根本道場(兼源地)にして而も法敵の爲めに焼打ちの法難に遭はれた古跡である爾來三百年星移り物かは

りて今に同村某氏の所有に歸して居るもの、體乎たる松林中令廟に一段高く二町四方の土壘を築きし遺跡を留め見らるるものにして坐る當年寺社の礎礎を偲び見るものがある、記念塔は此由緒ゆかりし御墳山の中心に建てたので建塔に就ては京都本山寂光寺の野口日主僧正頼人となり小竹俊雄石井寛俊の兩師發起人として専ら斡旋の勞を取られ中頃から手も日經上人に縁深き慶印寺の法嗣として喜んで参加を致して去年十二月十二日を以て除幕式の大典を擧ぐる事となつたのである碑の文字は小笠原子爵の筆であつて見上ぐる計りの小松石の巍然として中空に聳へ何事かを誇呼警告せるが如き雄姿に一種の壯觀を呈して居る、晴曇常ならざりし日和足の日に十一日の夕景より雲雲とさせる雨模様となり折角の式兵を雨ではと心配したものが明ければ十二日の朝まだきより一天拭ふが如き好天氣となり心氣爽快言はん方なく四方雲來の諸者無慮二千五百を算し大綱婦人會より寄附の甘酒五斗は見る／＼飲み盡し同村有志者よりの菓子供養さては番音器の演奏花火の打上げ等餘興も中々に奮つて居つた體で定刻となり一發の煙火を相繼に野口僧正五十餘員の大衆を率ゐて奏樂供養の大法要を嚴修することとなつた手は人々の希望により自分の卒業を感謝しつゝ前山で除幕の糸端を手繰りしのみならず法要中各地有縁者よりの祝電祝文七十餘通を裨前に展讀し奉つた後野口僧正の簡素にして力ある一場の講演を聴きて法悦にむせべる男女は夕陽土氣の間に白ける頃施本の日經上

地明會

◎本會は天晴會と相違んで天下の女性に日蓮主義の福音を傳へ其家庭に宗教的温情をもつてつれに平和の春風をそよめ渡らせ聖母の「男のしほは女のつからなり」と云へる教訓を實際生活の上に體讀して模範的の女らしき女性を養ふなばよとて生れたるものなれば世の所謂婦人の會とは其趣を異にし自ら其一節を會得し信するを得なば直ちに之を實行に移し

進で他をも教導せねばならぬので何れも兩香集に就て熱誠なる修養を勉み例會講演を開くことに信仰の熱を高めつゝあるが新春の初會は一月二十一日青山安川邸に開いた本多大齋正は會員一同と共に大本尊に法味を捧げ竹内美術學校教授は本誌に掲げたる論議に就て平易簡明なる句調により御尊容の福徳圓滿なるを説き婦人慎時時注意を促がして御尊容を拜せよと誨へ本多大齋正は一代教相を推戴して法華經の超群せる所以を示し成佛の大道は他の經典に就かざる旨を詳説して日蓮主義の尊と感に感ぜざるものがあつた講演終りを告げて一同に茶菓の饗應をなし歸路に就ひたのは午後五時過ぎであつた。

第一義會と妙教婦人會

◎東都日蓮主義宣傳の中堅として生れたる本會は茲に二星霜を送るに到り漸次發展の曙光を呈して會堂の狹隘を告ぐるに至り既に中央統一會堂新築工事を起し客冬上棟式を舉げて工を急ぎつゝあれば月餘ならずして宏壯偉觀なる大會堂は巍然として東都の天地に聳へ盛に教界の隱微を破りて覺醒の活力を興へ日蓮主義の隆々たる勢を以て國民の思想を震撼し統一すべきを思はしむ登に亦快事と望すや本會員は何れも熱誠なる信仰を抱住し聖祖の遺訓を奉じて方圓奮死するを法悦とするほどなる修養を積み外護の信徒として聖意を奉めざるものと云ふべし一月十六日淺草法成寺に

會せる會員一同は非常に満足せるのみならず是等會員の父兄又は主人等も其の風化の真好なるを喜び居り。

●實業青年修養講演 一月十五日午後七時より德教青年會の例會として「信仰價值」關田養叔氏敬愛の修養同氏の二席の講演あり第一席には信仰の發動する所以より説き起し迷信正信の選擇標準信仰が人事百般の上に及ばず勢力等に就き本化大教の正信を基礎として一同に信仰の何たるかを會得せしめ第二席には處世の要道種々あるも敬愛の念を養成するは尤も切要なりとて其の修養方法を説明したり此日は小僧の數入日なるを以て來聴者は殆ど皆無ならんと思ひしに却て熱心なる會員等は定刻前より詰めかゝるのみならず傍聴者の意外に多かりしは近來如何に世間一般を通じて求道心の動きつゝあるかを見るに足らん。

●法律顧問部の設立 世間には辯護士や法律學者は數多あるもこれらの人の支那を訪ふて法律上の鑑定又は説明を請はんとすれば多額の鑑定料や謝儀を支拂はざる可らず是れが爲め法律上の智識に乏しき細民や貧窮者は憐れにも他の爲めに自己の權利を侵害されて不慮の損害を蒙り又は無失の罪に陥る等のことあるは往々見聞する所なるが德教青年會講師關田養叔氏と日蓮主義の熱心なる信仰家辯護士法學士小西眞雄氏と謀合の結果如上の欠陥を補ひ貧者の親切なる相談相手となり權利の保護となり以て社會救済の一助たらんとするの趣意にて德教青年會附屬事業として法律顧問部を設立し小西法學士は亡父(關福院眞法日理信

て聯合講演會を開き午後一時本多大齋正導師として嚴肅なる法要を修し關田講師は「伊豆巡拜の所感」と題して伊豆の地に對する史實的説明を試み上人流罪當年の風俗の實況を述べて偉大なる日蓮の靈徳に及び無限の感に打たれたる事を語りて聽衆の直感喚び本多大齋正は新年の感を送べんとて壇上に現はれ近代思想問題に傾注するものや多きを加へ個人主義と國家主義物質主義と精神主義宗教と國家宗教と教育宗教と社會問題等の挨拶結合の重要な問題に我が日蓮主義を以て解決すべき時運に到達し希望と光明に充てる四十五年の新天地を祝福せざる可らずとして酒々一時開午に亘りて懇切に論議を興へられたり講演終つて後茶菓を供し會員持寄り御法の餘興あり中にも松本辯護士が「以長年間の御法經」「伊豆の巡遊」にて臺所用題板と本多大齋正の「釋尊の降誕地」「由天竺」にて中由天竺の當りしなどは亦何かの因縁のあるかにも感ぜられ會員何れも奇想天外より落ちるほどの面白きありて午後五時半散會を告げたりき。

知見會

新玉の年立ちかへる一月十日淺草法成寺に於て第三回の講演が開かれた正午過ぎより三々五々來り會するもの無慮八十餘名種家憲代本橋利平氏の手によりて餘興の著書讀み奏せられた午後一時半修法の後正二時より辯護士吉田珍雄氏の生死血脈山根日東師の「知見」と題

する講演があつた熱誠にして懇篤なる講話に來會者一同多大の教益を得たことを認める右畢りて餘興の著書讀み及び福引は頗る興味あつた尤も福引は山根師の妙案になりしもので「銀貨よりも」と題し「お札」と題して「薩摩守」で「澤庵」さては「興一兵衛」の旅行用具で「小田原提燈」「法開山の立派」で火吹竹など奇想天外より落下し來り滿座笑の吹に閉會を告げた何れも此會の近況盛況を呈するの爲め法實すべきことである。

德教青年會

◎新年會 關田養叔師の主管せる德教青年會は一月七日午後一時より同會本館たる淺草南松山町法成寺に於て本年に於ける同會發展の方法を議し勞働員一同の熱誠を興るため新年會を開き先づ幹事重原盛太郎氏の開會宣言幹事兼井中次郎氏の事務及會計上の報告ありて「新年の修養」關田講師の約一時間半に亘りて處世の要道を詳説せる講演ありそれより會員及講師顧問等一同庭前にて記念撮影を爲し茶菓及折詰書司を喫しつゝ此間中西中野其他二三の感想談餘興として落語福引あり萬歳を三唱し一同歡を盡し和氣洋洋の間に散會したるは夜七時半頃なりき會員は多くは十六七より二十三四位の商家店員職工等の實業家子弟のみならず世間には學生等を相手とする會合は多くあれど此の種の團體少きを以て來

士)の命日たる毎月十九日を期し午後一時より四時迄右淺草法成寺に出席し一錢の謝儀も取らず無料にて民利事其他法律上一切の事項を鑑定説明又は相談することとせり其の第一回を一月十九日に開きたり當日は來訪者は二人ありたるが本堂の御寶前に開福院の位牌安置せられ其傍の座敷を懸接室に充て此處に粗末な机を圍み親しく相談したるを以て二人の來訪者は共に歡喜と満足とを以て幾度か感謝の詞を述べて門を出て行きたり亦法科大學生市村英治君も出席して諸事餘詰せり爾後毎回補助として出席の答顧問部の略規左の如し

親善會

一、民事刑事其他一切の法律事項に關し鑑定又は説明を要する者は何人にも來談することを得

一、期定日は毎月十九日午後一時より三時迄とす

一、辯護士法學士小西眞雄先生常例出席す

一、場所は淺草南松山町廿九番地法成寺とす

一、鑑定説明等に就ては少しも謝儀を要せず

一、貧困者に限り無料にて裁判上の辯護の勞をも執るべし

一、静謐と眞面目とを欠く人は一切謝絶す

國明會

◎同會の地は勞働者多數を占め畫圖講演を聴くの餘裕あらざるためか參觀者其數夥なきも

◎淺草圓常寺に新年初會を一月二十八日例會講演を開き會長鈴木會長の熱心なる勸誘に依り定刻前より詰めかけ來り四十餘名を算ふるに至り午後一時修法を行ひたる後法學士小西眞雄は「信心に就て」と題し信仰は萬世不朽にして如何なる時にも發揮すべき所以を論じ日蓮上人は此信仰の純正統一を計るが爲に活動を演じ給へばならん吾等も之を自覺して信仰に就くべきを勸め野口日蓮は「心を九識に持て行く六識にせよ」と云へる論議にて本覺識を説明し眞誠は心の玉にして他は凡べて臣の心也臣の心を以て世に處するは誤り多し故に行は六識的に世間の事を按察して進むべきを教へて講演を終り同會は有力なる賛同者多ければ會長の指導其宜しきを得ば將來基礎成

りて大に發展するものあらむ。

四恩教林發會式

◎日蓮主義は感恩の念を強めて實際的人物を作り宗教信仰に於て等地に秀つると共に處世上にも機動的言動がなければならぬに國家を愛するの志厚しとて父母に給仕するの道も缺くやうではいけない亦君主に忠誠を盡すこと無類であつても國民の休戚を思はぬならば其は人として適宜なる常識を持つて居るのと言ひない人は必ず國家君主國民父母と云ふ者を念頭に刻み併行的に其信念を堅實にして置かねばならぬ本會は一月十一日淺草永住町妙經寺に於て發會式を挙げた野口僧正は法味を擧げて四恩教林の設立を告げ奉りて佛祖の照會を語りさらに講壇に於て本會設立の趣旨を説くこと切々にして能く其要點を諒解せしむるものがあつた次で本多大僧正は「四恩に就て」と題し國民と國家と君主との關係より説き起し我國體の如き特殊なる血と心との關係の存するの理義を明かにし父母の大事なる所以に就て幾多の適切なる例證を引き孝道の眞義を説き此の因者は信仰の基礎に立つべしと結論して一時閑餘の長廣舌を振ふて法益を施かたそれより福引の餘興や甘酒密柑などの聲樂ありていと心地よげに歡會するを見うけた會は同會にては講習課として毎週土曜日蓮花裁縫を月一回琴生花作文等を教へ野口夏江中西春子の兩女史擔任せらるゝと云ふが

大僧正小林日至上人の遷化

日至上人は始め兵庫縣に於て念禪門徒と教職を起し遂に六年を得て志方の地に妙信寺を創立す時は明治六年にてありき住職として居ると數年猶人に譲り寺院を離れて單身東都に日蓮主義の法鼓を鳴らし外護の善男女を養ひ獨立會堂を建設して法戰の陣營と爲し常に敵營に突撃して激烈なる戦ひを開き敵は漸く失ふて降を乞ひ門に集まる者其數甚だ多く講演を以て大法の妙味を傳ふることも萬餘回に及び三十年の生涯は出で教を説き入りて法を講ずるあるのみ亦上人は顯本大學林の長として出入二十年許々として講演致して能く上人の講席に侍して鍛鍊を加へられ者は能く布教に奮勵するの熱誠と元氣とを存すされば顯本家が豆粒の小教團に過ぎざれども今や國民思想の覺醒運動に對つて渾身の力を盡さず日蓮主義宣傳の大業に邁るべく異昧同心の聖訓を誦し激濁たる活動に勵勵して居るがこの法王の大戦を起して奮闘力戰すべく大決心を與へたのは上人が精神的調化に因ることであると信する吾人は上人の徳を觀るの餘地を存しない唯夫れ精神的大恩師として敬意と感謝とを表すること喜ぶ特に吾人は空秋九月山谷親善會に於て上人の講説を拜聴し其大意を十月發行の本誌に掲載したるを以て一段の感を深ふせざるを得ない。

上人一月二十三日病床に就かれ二十五日釋迦多寶十方の諸佛の肩にひつかけられて靈山

今の時代の普通教育上の缺陷を補ふべき施設なれば熱心以て事に當らば盛産を呈することと思ふ同會は篤き外護者たる中西芳山海野村譽爾居士と義親師等協力して會の發展を計られて居る願はくは健全に進んで事業の成果を擧られんことを望んで已まない(白雲生記)

品川教報

◎養徳兒童會 一月七日午後一時より妙蓮寺に開かれた集まるもの皆學校兒童なれば室内に庭園に三々五々圍を成して寒風の吹くのも意とせんでかけ廻るなどさりとて子供は無邪氣で元氣で可愛ものである定刻鈴が鳴るとそこは訓練の届いたもので一齋に室内に集り寂心持てよい國友月子嬢オルガンの獨奏を終ると笹川會長が人は心懸けを長くして偉落し人にならねばならぬとて英傑の逸話などを語り山根日東師は面白き御伽噺を得意の辯にていと平易に説き聞かせたので一種の教訓を與へ福引の餘興ありて各あたりものを手にしながら喜び勇んで其家庭に歸つた因に淺尾清藏居士は會の爲に盡して居るを見うけた。

◎正法護持會 一月十二日妙國寺に開く石川師は宗教が人生に必要な所以を説き本多大僧正は後首の所感に就て酒數萬言を費し現代思想の危機より進んで日蓮主義の立脚と理想とを詳論して活動すべき四十五年を迎ひ萬丈の氣焰を吐いて聽衆を酔はしめたりと云ふ。

學生同窓會

◎浦波の寄せては返る磯の邊りも峯の嵐吹きすさぶ山奥の奥も華の都も野の里もなべて驚々たる祥雲天地に充ち融々たる瑞氣昇平を表す新玉の佳節を祝はざる限やあるべき小石川雜司ヶ谷なる顯本大學林にては一月六日新春の同窓會は盛されぬ午後一時能井君の開會の辭に次ぎ今成林長の懇篤なる訓話野口僧正の有益なる講演ありき講演了りて珍世界を一覽し宴に移り祝酒三行彌々興に入り舞踏舞節薩摩琵琶吟ニツカ假裝行列福引等の餘興ありて嗚呼在塵抱長絶因殆んど悅樂嬉々の裡に時計既に四時半を報す乃ち來賓給木師の發聲の下に萬歳を三唱して宴を終へぬ。

におもひかれ候上人遷化の報各地に至るや同山縣より山名日宗禪より上田智盛遠州より山本通辨堺より高木木戸兵庫より高田日暢の諸師を始め在京者鈴木水日雄井村日成野口日主山根日東國田義叔今成龍徳莊川眞隆三上義徹田井日晃の諸師大僧正本多日生師は痛く痛惜せられて特に臨終正念の祈念を爲し信徒一同は上人の徳風を慕ふて情亦自から過るものがあると言ふまでもないが二十六日より二十九日谷中齊場にて式典を擧ぐるまで一刻の休みなく讀經唱題して其徳に頌へんとする至誠唯だ眞に感歎の外なく亦上人の調化がいかに精神の神典に刻まれて居るか拜想せられる二十九日は正午本多大僧正には大衆三十餘名を率へて大本尊の寶前に法味を供ひ夫れより弘通所を出で谷中に向ふ山名日宗高木木戸順の兩師麻の法衣袈裟を着し其他二名の弟子棺側供養し鈴木水日雄井村日成高田日暢上田智盛藤井本光の諸師亦棺の前後に侍し本多大僧正及副導師二名は腕車なりしも知名の宗教家皆徒歩にて奉送したるは頗る偉観であつた棺前には數對の蓮花生花と「大僧正日至上人の靈」及支蓮旗の二旗が懸つて居るさうして會葬者は靜かに支蓮を唱へながら慎重の態度であつた祭場に着いたのは午後二時で本多大僧正は如説修行抄の結文を擧げて佛祖の加護を仰ぎ野口僧正は左の教誨を讀み上げて上人の徳を頌した。

教壇草

奉勸諸無本門常住の三寶諸尊來臨影響知見照覽

語に曰く三年學ばんよりは三年其師を撰ばんには如かず務めて學ばんよりは務めて其師を撰ばんには如かずと師の大切なる以て知るべきなり。

本學院日至上人行年七十婆娑の教誨盡きて技に化を他界に遷し玉ふ有くも其化導に浴し其徳風を慕ふもの、痛惜惜能はざる所なり然りと雖とも退て性るに其生あり死ありと見るは是れ凡夫の凡見なり煩悩の山嶺たりと見生死の海渡りたりと見るも亦凡慮凡想なり人若し凡慮凡想より醒めも亦佛知見の本壽命海に入らんと至竟生死に退面は無きなり退命無くして面がも樂喜に衣を替るが如く本壽命海の波瀾はあるなり波瀾ありて而も常住不滅なり常住不滅を信して而して並に意義ある人生を見るなり日至上人の遷化し玉ふに當りて逝んで壽量の大教義を拜想し本師の知見と本師の大慈に感泣せざるを得ざるなり。

狀を案するに上人諱は日至字は整吾本院院と號す播磨縣路藩士國友儀助君の四男なり出で、小林氏を嗣く幼にして藩儒矢内氏の門に學び慶應元年廿二歳光寺日監上人の壽量品講義を聞て信仰の熱情熾然として加はり家を義弟順康君に譲りて明治十年四月十五日葦名日岡教正に就て華髮袈裟の身となり爾來刻苦風馳本多日境遠田日昌眞枝日蓮見玉日容の諸師に就て台當兩家の遺典を極め特に本化の秘妙を探得す。

明治十一年四月二十三日教導職試験に十六年十二月廿一日機少講義に任せられ三十三年一月累進して大僧正に叙せらる。

其教學及行政部面の經歷を數ふれば廿二年七月廿五日布教員に廿三年三月十九日大學林教授に全年三月廿八日評議員に全年八月四日大學林教頭に廿四年十月廿五日大學林長に任ぜられ教頭を兼ね全年十二月十四日依願林長及教頭を解る廿一年一月五日第一教區常置布教員に廿二年九月十一日評議員に再選廿三年八月三十日再び大學林教頭に三十五年九月十七日再び大學林長兼教頭に任ぜられ四十二年五月二十五日依願林長及び教頭を解かる

更に教義宣傳の方面を檢するに十三年揚州志方に於て五百井秀嶺僧顯成の念佛門徒と開答對論に大捷を博して妙信寺の新寺建立を敢て十五年僧前岡山に吳流市川貫哲と法論を戦はして凱歌を奏し三十一年東都に井上日也と論じて遁走せしめ轉じて著述の筆を數ふるも本宗綱要の編纂誦草講義の完成等其教學界を裨益するもの尠少なからざるなり

若夫れ信仰鼓吹の淨業に到ては明治二十四年本多大僧正等の志士と宗義擴張を企て時の當路者と共に其見を異にし容れられざるを以て二十五年一月神田龍樂町に顯本法華弘道所を創設し宗義の弘通に従ひ序で淺草會前に轉じ盛に法鼓を鳴す期年ならずして正義の信徒數十名を得て淺草新福寺に會堂を建築し今の社團法人顯本法華會是なり爾來宗の外に其主義を鼓吹し漸く宗門覺醒の期到り三十一年宗名公稱の成るあり法に其宗旨を遂く本宗の名と共に上人の功勞は常に輝かん

又上人が徒弟教養の功績に到ては法子故吉田日輝山名木信日宗高木本願の訓育其宜きを

至て閉會した、尙山本師の熱烈なる法鼓の反響に今や見付の天を覆て近々中に一の有力なる會が組織せられ町内第一流の人々が自他宗を問はず集合して上人の主義人格に就て鑽仰研究せんとの企があるさうである嗚呼至徳の昔開祖が眞間の日宗と盛に論じたといふ此の由緒ある遺蹟が山本師に依て再び復活の機運に向つたといふ事は衷心歡喜に堪へぬ事であると同時に開祖什師も定めし榮耀として笑みつゝ見付の天地を逍遙してましますであらう

豊橋教報

◎豊橋教界は日蓮主義を以て各方面を席捲し地方一流の名士を網羅して天晴會設立の盛運を見るに至れるが國友文學士は更に歩武を進めて青年修養會を組織し青年學生の爲に毎日曜日夜間講學方面より宗教方面より講話會を開き日蓮主義を鼓吹しつゝあり一月四五六の三日間冬期休暇にて歸郷せる學生を中心として大に法鼓を鳴らせしと云ふ

◎婦人會は其後益々盛況にして會するもの一百五十餘名に及び國友瀧井文學士の有益なる講話ありて餘興に移り義太夫琴落語雜劇福引等ありて中々の賑ひなりしが當日入會者の重なる者は大口豊橋宿長母堂水野二等軍醫正母堂川口少佐夫人長少佐夫人尾條大尉大平大尉の夫人にして一段の光彩を添ふものありしと云ふ

得たるのみならず遠近寫學の者爰を預て其門に子來し其學風を承繼し法鼓を四方鳴す宗門に上人の如上の功勞を認め四十二年五月二十五日二等功勞章を贈る

老て益々矍鑠壯者を凌ぐの概ありし上人も四十五年一月二十三日悠忽逝きを感じ療養看護其病を奏せず二十六日午後七時眠るが如く安祥として唱題聲裡木覺の都に歸り玉ふ

然りと雖ど上人學生の行願たりし大法の興隆我等同門の眞實自今誓て異體同心一層の奮勵努力を敢てせん上人の靈幸に安んじて化を他界に施し玉へ教德一享仍而加件

維是明治四十五年春一月二十九日
本化沙門當正日主敬白

次下聖城氏吉田氏岡山能仁寺一師の形辭代讀帝國大學日蓮辯會市村氏の形辭讀より各地の形辭文九十六通を朗讀して靈前に供ひ會葬者一同異日同音に唱題して式の終りに告げた各地形辭の五六を擧ぐれば大阪尾木日吉松屋忍水高知裁判所保良檢事岡山よりは宇垣卯三郎外十數名兵庫縣志方妙信寺住徒一同岡山縣津山信徒一同姫路野老乾爲京都妙壽寺山内一同廣島大橋日鏡千葉縣中村乾信山岡會後坂本大僧正眞經大僧正木村乾中支學林職員一同同路より中村祐七等の諸氏である當日會葬者の重なる者は兵庫縣妙信寺德代松木茂一郎兵矢野大審院檢事小笠原丁兵佐藤海軍大佐岡中慶三郎氏を始め千葉縣より竹内僧都小高日唱師顯本大學林學生一同品川正法護持會員であるが八百餘名の會葬者何れも合掌唱題せざる者はない吾人は特に注意を拂つて他宗徒一

京都教報

◎一月十三日本山信徒及國光婦人會員等百餘人の參詣ありて初寄會を催し野老權正の説教福引の餘興等ありて中々盛んなりき

◎全十八日例會演説會を二條妙滿寺に開く「新年の傳教」銀井乾升「天災より得たる教訓の一二」川崎英照法華經主義と現代「野老權正の講演ありき」

◎廿日京都聖祖門下同志會は第四回新年宴會を日蓮宗本山木法寺に催す來會者六十宗狀會務報告祝辭演説各自餘興及字都宮主計之介氏の統一節等ありて盛會なりき

◎廿一日京都天晴會例會を開く講師には妙覺寺貫首岡田齋正出席せられ「本尊に就て」の講演ありしそれより幹事の改選を行ひ川崎英照淵田惠綱中澤眞立西村治兵衛西村喜一郎天野治兵衛村上勘兵衛兼田義路政岡亨伊藤正順氏當選す五時より一同新年宴會を催し餘興數番ありたり

◎廿二日久遠寺に例會の演説會を催す辯士には金光孝順野老權正出席し法鼓を布けり

◎妙光婦人會の設立金光孝順師發起として法光院信徒其他より會員を募集し昨冬十二月十五日開會式を挙げ野老師及金光師出演し本年一月十五日第二回例會を開き金光師「我國の名教」に就て講演會員目下四十名ありと云ふ

◎護正會川崎英照師の經營せる如上の會は青年信徒の會員のみにして講師川崎英照師は法華經大意日蓮主義の題下に毎月十日夜間催し

人なりとも見付けばやと思つたが悉く念珠を手にして聲を限りて題目を唱へて居るので今さら上人の化力の大なるに感じ掌を合せ禮を作して去る

東海道教史

見付教報

◎去年一月播州から轉任し爾來盛んに法鼓を打てる山本師は去る十二月布教講演開始の滿一週年祝賀として大講演會を開いた當夜は至て寒くあつたにも拘はらず聴衆は約百五十名で午後七時に至るや山本師は導師となつて簡單で然も壯嚴な法要を修め了て直に講演に移つた金子完一氏は「我が所感」と題して眞面目に自己の宗教上に於ける所感を披瀝し次で永續報徳社會長壽壽喜作氏は「日蓮上人の高恩」と題し上人の高恩は山よりも高く海よりも深い吾人の之に報ゆるの道唯上人の主義を遵奉するの一あるのみと論結し次で吉田師は「日蓮上人の主義及人格」と題し御遺文を引て上人の主義人格に對する正見を述べ最後に山本師は「偉人日蓮上人」の題下に登場して上人の偉人としての眞實を論じ午後十時三十分

一月十日は其第七例會を催せり又近く大に盛本傳道を行ふべしと

◎護正婦人會は同じく川崎師の經營にして若き女子の爲めに毎月十六日午後一時より本山内成就院に開催し婦人の道に就て講演しつゝあり尙同師の經營なる家庭法話は西村總左衛門氏宅其他毎月十二三回に及び好結果を示しつゝあり

大阪教信

◎西部第六回講義會の準備本年四月に開催さるべき第六回顯本法華宗西部講義會は大阪市西高津中寺町蓮成寺を會場として四月三日より九日迄一週間の豫定なるがその準備として昨年九月より同寺境内に新座敷一棟を建立し年末に其工を竣へたり右に付蓮成寺保存講義會は新座敷建立と同時に座敷其他の修繕を引受け二事監督として幹事酒井和吉氏終始盡力し幹事部山庄兵衛部山庄吉井日市右衛門西川澄夫の諸氏各幹事は一月五日には新築落成記念の祝宴を催し關係者一同撮影せり工費總數一千五百餘圓建坪十四坪二ヶ月半を建築するも格天井破風等意匠を凝せりといふ道は四月講義會の砲管長現下を始め講師の客殿に充つる善にて同寺住持經木日輝師は禮信徒と共に今より諸般準備に着手しつゝありといふ

◎耳原法華寺日教會は客年九月創設し爾來月々例會を催はしつゝあるが一月七日には新年會を兼ねて法華寺に於て第四例會を開催し先

づ一同大本堂の御寶前に法味を献げ夫より左の講演あり。

開會の辭 會員 虎谷喜太郎「身讀法華」該寺主 兼名玄徳「日蓮上人の人生觀」布教師 梶木日種 虎谷君は會を以て實價あらしむべき旨を述べ 兼名師は信仰の要諦を述べし梶木師は先づ行 學の二道を開むべき祖訓を述べ上人の人生 觀は苦樂を超越せる樂天主義なる旨を説く會 衆廿二名一同法説に任して新年宴會を催し會 員山中又吉君の所感演説等あり午後一時より 五時に至りて閉會。

◎大阪天晴會第十六例會は新年會を兼ねて一 月廿三日夜東區博愛町三丁目魚利樓に開會幹 事池田爲三郎君は先づ前年度の會務報告を爲 し役員の改選を計る即ち委員協定の左上の如 く選定滿場を告ぐ。

幹事には池田爲三郎岡島伊八梶木日種八代祐 太郎山岡順太郎の諸氏評議員には西島竹藏細 字榮渡遠益夫吉田善之助野口友七福井秀吉郡 山庄兵衛三宅房次郎清水英吉島田小佐久氏に 野口日主君は岡島伊八野口友七左の講演あり 日「吾が國體と日蓮主義」梶木日種「信仰の活 現」清水英吉氏の講演を了り池田岡島吉田等 諸氏の感嘆滿くが如く一同法説に充ちて、午 後十時閉會。

神戸教信

神戸日蓮蓮佛會は神戸高等學校に於ける同 會の諸君の續を披かんがな。

隨力演説部清規

- 一、隨力演説部は本化行學會の一施設なり故 に本化行學會員を以て組織す
 - 一、本部は本化行學會の旨趣に基き日蓮主義 研究機關として會員相互に其領解と感想と を隨力會談し以て信解の増進を圖るものと す
 - 一、本部は例會を毎月一回「第二日曜日夜」本 會事務所内に開く但し變更ある場合には通 知すべし
 - 一、會員の紹介あるものは會員外と雖も來聴 するも差支なし
 - 一、本會々費は本化行學會に於て支辨す
 - 一、本化行學會に於て講演會を開催する場合 には其月に限り本部例會を休會するものと す
- 隨力演説部第一例會を開く「開會の辭」高橋正 平「法華經の流傳」高田久次「信仰の感化」平岩 平八郎「正義の爲に勇敢なれ」服部新五郎「人 と信念」大塚惣十郎「精神」小池捨吉「人生と宗 教」本多傳作「讀經獨吟」鹽山麗作「いづれも熱 烈なる信仰を述しての告白なれば共に修養に 實するを得て効益多大なるものあり午後十一 時半高田幹事閉會を告げ來會者一同茶菓の饗 應あり其間信仰に關する疑問に感想等につき 快談を試みたり會員の眞摯熱心なる態度は 確かに其實質内容の充實を示して餘りあり けり。

會の第七例會は新年會を兼ねて一月二十四日 學生會館に開催し梶木日種師の「日本國と法 華經」に就て國體と法華の教理と合致せるを 説き聖德太子の教訓と上人の理想を演べ國民 として法華を信ぜざるは憾嘆に堪へざる旨を 論ずること詳細にして痛切な極む談話會を開 き感興湧いて萬丈の氣焔が擧がつて居つた。

栃木教報

◎栃木縣栃木本化行學會は隨時新道の先輩を 招聘して講演會を開き通覽文庫を以て毎月新 刊の諸篇を題覽し來りしが昨秋十月本會主催 の傳教實義講演會に於て大法輪を轉じたるよ り已來地方一般人士は日蓮主義が道途傳教と 大に其趣きを異にせるに驚嘆し欽慕と懷疑の 眼を注ぐに至り就中青年有志及教育家等の中 には直接間接に本會に對して日蓮主義研究の 爲め連日會合の機關新設を懇望せらるゝあり 本會は此の絶好の機會を以て隨力演説部を開 設し各自が研究の結果を以て互に其領解を 告白し以て信解増進を人格修養に資する所あ らむと欲し左の趣旨により其第一例會を去る 一月二十一日午後八時より本會事務所に開會 したり隨力演説部の趣旨及清規左の如し。

青森地明會

◎日蓮蓮佛會青森地明會は一月十四日午前十時 より市公會堂に於てその大會を開きたり由來 同會は日蓮の主義を辨明し日蓮主義を弘通し 以て國家の利福を増進するを目的とするは言 ふまでもなく當日の會するもの四十名にして一 同着席するや阿部氏は開會を宣し次て安浪氏 は計らずも東京天晴會と期を定めずして日の 同じかりしは何等の因縁ならんと言き起し て開會の辭とし西人格及び一代の經歷その生 地等細大洩らさず論せられ代りて「中村氏は 『經典上に懸れたる日蓮上人』と題し佛道の傳 法を弘説せられてより以て今日に至る來歴や 或は東西兩本願寺佛光寺派の附屬日蓮宗の立 脚地點及び今後の覺悟と活動並に地明會員の 一人として覺悟を述べ日蓮主義は國家主義な りの禪宗眞宗門徒宗果ては專教一派の教 世平等何等の疑言を並ぶるものか我等にとり ていへるものは何の價値を添ふるものぞ須く 日蓮主義ならざるべからず國家主義ならざる べからずと結びて詳述しそれより來實の講演 に移り終つて墨瀨氏の薩摩修善寺の調川中島 等を演説しそれより福引にうつりその間に配 膳を了らしこゝに大會は開かれ片隅には著音 機を響へられて一層の興を添へたりかくして 充分の快を盡し教會したりと云ふ願はくは健 全なる發達を祈る。

て一打又一打せる激なる鐘聲が思想の太虚 に波り洶奥の琴絃に觸れ人心に響けることゝ 如何に大なりしかよ果敢これ奮勃せる時代を 求の機運に投じざる反響なりき新く本會は講 演會と題覽文庫上に依り得たる各自の領解に 就き其研究の結果と感想の告白とを談話交換 すべく「隨力演説部」てふ一機關を設くるに至 りぬ隨力演説部の標は大型釋尊の「爲父母家 親。善友智識。隨力演説」なる法華經の聖語に 基き隨力なるが故に力あるは有るに任ぜずし きは無きに隨ひ必すも高遠と言はず必ずし も幽玄を強へず唯日蓮聖人の謙抑し奉り道な る故に其智識實感に應じ會員互に其懷抱を披 瀝して修養に資せんとする眞摯なる會合を意 味すされば吾人は斯の小なる研究機關により 進んで正法宣傳國體擁護の一分を盡しされば 退いては信解増進人格陶冶の資糧に供せんこ とを企願す然りと雖日蓮聖人の色相導引玉 へる甚深廣大なる立正安國の妙法は到底凡眼 を以て窺ひ奉るべくもあらざれば其御衆の 正信に養ひ奉るを得ばこれ一に聖祖靈徳の薫被 に歸し奉り又凡見徒らに正意を講らば其罪過 偏へに吾人の荷負する所伏して莫くは佛祖三 寶哀慈照臨を垂れ玉ひて所期の萬分一をも果 させ玉へ。

兒童園の設立

◎成島泰行師は國民道徳修養を目的として兒 童園を組織し一月七日上總豐成村法華寺に附 園式を擧げたり當日會場の大廣間には萬國旗 等の裝飾を爲し午後一時開會「開會に就て」成 島泰行師「千年の夢」矢部兼廣校長並に紙田安 雄氏の祝詞ありて後餘興には園主の作に係る 『町村手球歌』番音器「光之幸谷小川氏」琴（土 屋榮子）常盤カルタ等數種あり出席兒童一百 二十餘名にして却々の盛會にて午後四時半閉 會を告げたりしが將來新道教育のため盡力せ らるべしと云ふ。

和譯法華經成る譯者山川智應 氏が苦辛の結果分章經意の大 綱を示し加ふるに、本文、脚 註、文學の索引あり巻頭田中 居士姉崎博士の序文あり裝釘 美にして袖珍本なれば携帶に 便也

發行所は東京麹町飯坂町三丁目 新潮社 定價金壹圓參拾錢

北海道江別法華寺移轉敷 地寄附者芳名

金拾五圓	妙國寺住職	本多	日生
金拾貳圓	本光寺住職	今成	乾隆
金拾貳圓	慶印寺住職	山根	日東
金拾貳圓	本教寺住職	井村	日成
金拾貳圓	妙經寺住職	野口	日主
金拾貳圓	圓常寺住職	鈴木	日榮
金拾圓	常支寺住職	伊藤	寶樹
金八圓	妙蓮寺住職	住川	真應
金三圓	壽仙院住職	川崎	義典
金三圓	常福寺住職	金原	泰秀
金七圓	久成寺住職	田井	日晃
金三圓	本念寺住職	大須賀	芝遊
金二圓	正法寺住職	安藤	日栄
金五圓	顯本寺住職	山崎	日暉
金三圓	木授寺住職	笠原	珠瑞
金四圓	清光院住職	伊保内	教精
金三圓	善慶寺住職	石川	顯隆
金六圓	法恩寺	森本	真真
金六圓	寬受院住職	飯倉	憲章
金五圓	妙顯寺住職	田島	義潤
金二圓	蓮華寺住職	吉田	義着
金八圓	法成寺住職	松田	安榮
金三圓	盛岡法華寺	三上	禎子
金五圓	八戸本壽寺	渡邊	元教
金五圓	圓若納	中田	量叔

金二圓	東京妙經寺内	森	義親
金拾圓	姫路妙立寺住職	野老	乾隆
金五圓	京都久遠寺住職	坪永	日登
金二圓	大慈院住職	銀井	乾隆
金二圓	法光院住職	金光	孝碩
金二圓	成就院住職	川崎	英昭
金二圓	妙満寺内	寺島	庄三郎
金一圓	妙満寺内	渡邊	妙信
金二圓	圓部大乗寺	木村	日順
金六圓	織部寺内	木村	義明
金五圓	大阪蓮成寺	根木	日種
金二圓	大阪堂開寺	古谷	養真
金二圓	堺妙満寺	高木	木順
金七圓	名古屋密徳寺	岡本	圓正
金五圓	名古屋靈山寺	山田	日廣
金五圓	諸川越境寺	長谷川	日濟



謹告
一、本團發行以外の書籍は取次をなさず候也
本團への御紹介にして返信料なき分は御答致さず候間御承知當願上候也

本團會計より誌友に告ぐ
一、本團は誌料未拂の方に集金郵便にて計算差出候處理由もなく拒絶せられた方も有之日蓮主義者の態度として感心不致候末拂者は此際精算願度候

宮殿●須彌段 前机●幢幡 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



注意

佛具と稱すれども此の種類多岐有之候を以て一々記載する能はず。依りて特に佛事正價目録書を製作置候に付御入用の御覽あれど寺院様方御入用品一々迅速進呈仕候。此の目録を我が買物安價にでき升。早く取らせ御覽あれ其の正價用の品は

佛具 佛具一切の類 大般若經一切經經 理分 位 大衆 佛具 佛具一切の類 大般若經一切經經 理分 位 大衆 佛具 佛具一切の類 大般若經一切經經 理分 位 大衆

佛具卸部

小賣部

本多大僧正講演 同八秘藏の殘本十數部頃與す 本多大僧正著

法華經講演集 如來壽量品

價金五十錢	郵稅四錢
價金二十錢	郵稅二錢
一部金五錢	郵稅金二錢

勤行作法

橘香集

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵稅五錢 一ヶ月前金六拾五錢郵稅六錢 代金へ振替貯金口座東京一三一九番へ拂込マシ此場合ニハ誌料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十五年二月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 **三法堂佛具陳列場**

東京市淺草區北清島町十四番地

電話二七七八拾三番 振替貯金東京二〇二七九

本團

本化大學準備學會發行（毎月一回發行）

三保講演集

一部金二十錢
一ヶ月金三圓
(郵税共)

第一輯より第七輯まで

●日蓮主義と武士道 小笠原海軍大佐 ●日蓮主義と人物
陶治 小林文學士 ●四條金吾別枝智教 ●西洋文明の由来
結崎文學博士 ●日本國の祖先 清水淡山 ●南條氏の信仰
保阪智吉 ●感化田中哲學 ●日蓮上人の教學及事蹟 花房
日秀 ●三位日行考 中村智藏 ●隅州三島開教史談 小笠原
春翁 ●池上氏の信仰 志村智盛 ●高山樗牛の精神的發達
結崎博士 ●宗教觀に就て 山崎紫紅 ●歐米現代思潮評論
桑原智都 ●日蓮聖人の自覺に就て 高島平三郎 ●日蓮上
人の教學及事蹟 富谷宣誠等……………

宗門各派の學匠及現代知名の人士が日蓮主義の研究を
各自得意の壇場より研鑽發表せるものにして宗門の鋪
素必讀の月刊誌なり各講師の寫眞掲載、菊版每號百頁
内外二月第七輯發行

發行所

静岡縣清水港三保松原
(振替口座東京六六七番)

師子王文庫

田中智學居士著 (言文一致感振がな付)

日蓮聖人の教義

頗美本
菊版七
百餘頁

○正價金二圓五十錢(送料内地金十二錢)

(略目次)

○第一篇(總要篇)には「用意」「釋名」「概要」「大統」を
叙説し○第二篇(教判篇)には教機、時、國、教法流
布の前後の五綱教判を細説し○第三篇(宗旨篇)に
は、本尊、題目、戒壇、三大秘法を詳説し○第四篇
(信行篇)には「信行」「修行」「願業」等を周説し○第五
篇(史傳篇)には「日蓮聖人の略傳」「宗門沿革」「有名
なる史蹟」「一々寫眞添」「名家略譜」「七百年間の年
表」を總説し○第六篇(雜要篇)には「各地異跡案内」
(寫真人)宗門名著略目錄「研究案内」達意的並に組
織的)を架説して遺憾なく要領を得せしむ又冠語に
は科語用語及本文のむづかしさ義理を一々解釋會通
して、初心者にもよくわかるように設けり
本書の内容はこの略目次によりて知らるべし

神道と佛教

海軍大佐 佐藤鐵太郎

第 二 百 五 十 號

統一



力
文學士 小林一郎
國家經綸に關する會同問題

記者

日蓮上人の苦衷

大僧正 本多日生

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可(毎月一回) (東京三島印刷株式會社印刷)